

精神保健福祉領域のソーシャルワーカーの認識の変化

—養成課程卒業後2年の「自己規定」と「対象者観」—

○ 日本福祉大学 大谷 京子 (会員番号 002998)

キーワード：自己規定、対象者観、経年インタビュー調査

1. 研究目的

専門職アイデンティティには多様な定義があるが、専門職集団で共有される、他の専門職と一線を画す「態度、価値、知識、信念とスキル」であり、個人が担う専門的役割に関連する (Scholar et al. 2014)。日本ではソーシャルワークは、その職種の名称が不統一であること、実践領域の多様性、業務内容の幅広さ、資格制度との整合性のなさなどを背景に、ソーシャルワーカーの専門職アイデンティティの共有が困難になっている。

しかし専門職アイデンティティの共有は、専門職発展を促進する原動力 (高良 1998) になる。さらにアイデンティティは静的でも中立的でもなく、実践を通して継続して変化させ続ける社会的に構築されるものである (渡部 2015)。そうであるならば、養成教育において培い、現任訓練やスーパービジョンにおいて涵養することが重要である。

そこで、ソーシャルワーカーはいかにしてソーシャルワーカーになるのか、成長の軌跡を明らかにすることを目的に、養成課程卒業後の3年間を追いかける経年インタビュー調査を企画した。

職業的アイデンティティを構成する広範な要素の中から、先行調査において専門的価値を表現すると示された「自己規定 (自らの役割をいかに規定するか)」と「対象者観 (クライアントをどのような者と捉えるか)」に焦点を絞る。本報告は、養成課程卒業後2年時点での「自己規定」と「対象者観」を明らかにすることを目的に実施したインタビュー調査の報告である。

2. 研究の視点および方法

調査期間は、2017年2月10日から3月18日までである。調査協力者は、2014年度のインタビュー協力者であった、社会福祉士、あるいは精神保健福祉士養成課程 (3大学、1専門学校) を卒業予定のPSW14名の内、現在もPSWとして職業継続している13名である。

「自己規定」と「対象者観」を知るために、インタビューガイドとして、①PSWはどのような役割を果たす職種だと考えていますか、②今現在、自分はどのようなPSWであると思いますか、今後の希望? ③あなたにとってクライアントはどのような存在だと考えますか、④クライアントからどのように評価されていますか、今後の希望? の4点を設定し、半構造化インタビューを実施した。その音声をICレコーダーで録音し、すべて逐語記録に起こした。

語りの中から、「自己規定」と「対象者観」に関わるとみなされる箇所すべてを抽出し、KJ法にならったカードワークによって抽出された要素同士の関連を検討しながら、類似するものをカテゴリーとして整理した。

3. 倫理的配慮

調査協力者には研究の趣旨を口頭と文書で説明し、調査協力の承諾を得たうえで契約書を交わした。録音データは研究以外の目的では使用しないことと研究終了後に廃棄することを約束し、その他は日本社会福祉学会研究倫理指針に従った。

4. 研究結果

「自己規定」については、ある程度の業務はこなせるようになったものの、「自分がどんなワーカーか分からない」「迷走しているワーカー」と表現する者と、「PSWとしてようやく一步を踏み出した」と感じている者に分かれた。また「ワーカーというよりスタッフ」や「PSWというより相談員」と言うように、職名による「ソーシャルワーカー」という名称に対する違和感の表明もあった。また、卒業前から二分される「頼りにされる、お礼を言われる存在」については、依然として志向性が分かれた。

「対象者観」については、「教えてくれる、気づかせてくれる存在」という表現が共通しており、「才能の宝庫。人間として良いところをたくさん持っている」といったストレンクス視点も多くが表現した。ただ、「仕事の相手」という捉え方には賛否両方あった。また卒業前には語られた「支援の受け手、助けが必要な人」という捉え方は表現されなかった。

5. 考察

卒業前のPSWイメージと2年が経過した現時点の「自己規定」には大きな差があった。しかし1年前の「自信のなさ」からは抜け出し、「悩むことを覚えた」と表現するように、着実に自分なりの自己規定を形成していた。そこで、理論と実践とを結びつける現任教育、専門職アイデンティティ形成のためのスーパービジョンが必要である。さらに、探求するための指針となる専門職アイデンティティ教育が、養成課程においても必要だろう。

調査協力者は、当事者から「かわいがられ、教えられ、気づきを与えられる」経験を通して、単に支援の受け手であるという「対象者観」が変化していた。自分の支援に対する自信のなさの表徴でもあると考えられるが、ストレンクスを強調する語りも増えていた。さらなる養成教育における人間観、対象者観の醸成が求められる。

本調査には質的調査の限界もあり、総合的な専門職アイデンティティの様態とその成長プロセスの解明が今後の課題である。

本調査は、平成26-29年度文部科学省科学研究費基盤(C)の助成(課題番号26380800)を受けて実施したものである。